

〈神奈川県庁本庁舎正面玄関にて〉

今日は私たちの退庁式のために、こんなに大勢の職員の皆さんにお集まり頂き、誠に恐縮に存じます。

私は今、この正面玄関の前に立ちまして、今から一六年余り前の昭和五〇年四月二三日の朝のことを鮮やかに想い起こしております。空はきれいに晴れておりましたが、肌寒いような朝でした。銀杏並本の新緑が目には滲みるようでした。バルコニーから紙吹雪が散り、五色のテープが舞っておりました。まさに興奮と感動に包まれた長洲知事の初登庁の朝でございました。

そして私もこの日、人混みにもまれながら、この階段から県庁生活への第一歩を印したわけであります。その時、長洲知事の学者時代の愛弟子の一人である、ある大学の先生から「久保さん、最低二年は頑張つて長洲さんを支えて下さい」と言われたことを覚えております。私は内心三カ月、できれば半年は頑張つてみようと思つていたわけです。政権交替期の雑用を済ませたら、早く自由の身になりたい、というのがその時の私の本音でございました。県庁の仕事に自信がなかったのも事実であります。

ところが、いつしか半年どころか、二年どころか、早くも一六年の歳月が流れてしまいました。まさに感慨無量であります。県政について全くの素人でありました私が、こんなに長い間仕事を続けることができたのは、本当に大勢の職員の皆さんの温かいご支援、ご協力の賜ものと思っております。本当に有難うございました。

私はこの一六年、知事の補佐役を務めてきたわけですが、いくつかの共通の思いを県政にこめてきたと思います。例えば、神奈川県政を理念と哲学のある県政にしたい、発信能力の高い個性的な県政にしたい、県内だけでなく、全国に、そして世界に通用する自治体になりたい、といったことでもあります。神奈川県政は、この16年間、長洲知事のリーダーシップと職員の皆さんのご尽力によりまして、この方向に向かって大きく前進してきたのではないかと思います。どうか皆さんのお力で、この流れをさらに大きく発展させて頂きたいと、心から願い願う次第であります。一六年間、私なりに精一杯仕事をさせて頂きましたので、とくに思い残すことはありません。このたびの人事異動で女性部長が初めて誕生しましたことは、退任にあたり最も嬉しいことの一つであります。

私は、コワイ顔をしておりますが、私も人の子でありますから、今日限り県庁を去ることについて、一方で大きな解放感を感じると共に、一抹のさびしさを感じていることも事実であります。しかし、私は今日限りあの世に旅立つわけではありませんし、仕事の面でも知事からのお話で、ひき続き県政と深いかかおりのあるところで働くことになりましたので、今日のお別れは〈ひとまずのお別れ〉ということにさせて頂きたいと存じます。職場は離れますが、これからも友情ある交流を続けさせて頃ければと思つて

おります。

知事はじめ、皆さんが益々お元気で、立派なお仕事をされますよう、心からお祈りしつつ、お別れの言葉といたします。皆さん長い間本当にお世話になりました。有難うございました。